

会報 峠 とうげ

河井継之助記念館 友の会会報 第16号 2014.10

編集・発行 河井継之助記念館 新潟県長岡市長町1丁目1675-1 千940-0053 Tel.0258-30-1525 Fax.0258-30-1526 頒布価：50円（送料別）

長岡地域と与板地域の二つの似た大きな戦い

友の会会計監査 水野 秀雄



長岡市は平成の合併により広域になった。

この地域には戊辰戦争時、信濃川右岸側に牧野家の長岡城、左岸側には井伊家の与板城があり、日本を二分する戦争でこの両藩は敵同志となった。一方、時代をさかのぼると、戦国時代の「御館の乱」のときも県内を二分する戦いの中で戦火を交えている。

一、戊辰戦争

長岡藩、与板藩とも徳川譜代の名門大名として隣接しているが、前者は会津藩を中心とした奥羽越列藩同盟（東軍）に属し、後者は本県の内でも数少ない新政府軍（西軍）に属した。

与板周辺では、長岡城を中心とした大激戦程ではないが、四ヶ月余り激戦があったがあまり知られてはいない。東軍の会津、米沢、村上、桑名、上山諸藩は与板周辺の各所から与板城を目指して攻撃を開始した。これら諸藩に對戦する与板藩には、長州、薩摩、飯山、富山、尾張、松代、高田、高遠の各藩兵が加わって抗戦した。注目すべきは、勤皇の民間義勇兵の方義隊（居之隊）も加勢していたことである。五月二十八日には早朝から戦闘が始まり城の数百メートル近くまで攻め込まれ夜半には戦火により城が焼失してしまった。これ以降も膠着状態が続き和島や、出雲崎等の与板周辺で戦闘が続いた。与板藩は二万石の小藩ではあるがもし陥落すると西軍は、越後の中央部分の拠点を失うこととなり政局に与える影響が大きいと認識してか、関原の会議所において長州藩の山県有朋、土佐藩の岩村精一郎は与板へ戦地状況把握

のため度々来て加勢している。この戦争には武士のみならず農民や商人等一般住民も多く人足として、また資金や住居、物品の提供を強制されていた。供出物資には米、薪、柴木、杉枝、縄、俵、沢庵、梅干、味噌、味噌漬、茄子、胡瓜、青菜、みょうが、ごぼう、酒、等の種々の物があり、例えば沢庵は一軒に三本、十本と指定されていたと与板町史には記されている。

戦争による武士の戦死傷者も当然多いが、住民も人足として戦地において流れ弾に当たり死傷したり、戦火で家を失ったりして甚大な被害を蒙っている。封建制度を覆した明治維新、即ち日本の政治制度の近代化は多くの住民の働きや協力、犠牲の上に成立したものであると我々は認識すべきである。

二分する内乱があった。与板城（直江）は中越では数少ない景勝側で、對する景虎側の長岡地域の蔵王堂城（丸田）、栖吉城（上杉）、栃尾城（本庄）、小木城（板屋）で周囲を囲まれる状況であった。与板周辺各地で戦闘が繰り広げられ、この戦いでも多くの住民が犠牲になったと思われる。現在世界各地では同じ国内で宗教や、民族、政治信条の違いで、悲惨な対立を繰り返している国家（ウクライナ、シリア、イラク、中国、タイ等）がある。「歴史は繰り返す」というが、未来永劫日本国内でこのような争いが絶対に起きて

二、御館の乱

NHK大河ドラマ「天地人」はまだ記憶新たであろうが、上杉謙信が亡くなって、二人の養子である景虎（北条氏康の七男）と景勝（長尾政景、兼信の姉・仙桃院夫妻の子）の跡目争い、通称「御館の乱」と呼ばれている越後を

直江兼続



第3回米百俵まつり 中央初代兼続役の筆者

欲しくないものである。

参考文献「与板町史」連史編「下巻」

水野秀雄（みずのひでお）プロフィール
昭和17年（1942）長岡市与板生まれ。新潟県職員として県庁や県庁の各部署に勤務。新潟県職員として県庁や県庁の各部署に勤務。平成21年（有）水野不動産、行政書士事務所、富士火災海上保険（株）代理店開業。新潟県行政書士会副会長、河井継之助記念館友の会会計監査、長岡郷土史研究会監事。

峠抄 ● とうげしょう ⑮

今年の花火は中越地震から十年、フェニックス10や平原綾香さんのジュピターの生ライブなど力が入っていた。何よりお天気に恵まれた。全国では異常気象が続き、夏イベントの開催も変更を余儀なくされたというから、打ち上げられたのは幸いだった。花火客は百三万人を超えたそうだが、八月二日、三日の記念館には、涼を求めて足を運ばれた方も多かったと記憶している。今年もじつとりとした空気を感しながら、花火のまたたく夜空を見上げ、長岡の夏が過ぎていく。そしてこれが終わると、東北の夏祭りが始まる足音が聞こえる。東北の祭を追いかけていくと、東北を北上できるというが、どこか長岡の夏はそのほじまりのように感じるのである。

（高柳）

『峠』の越後長岡を歩く ⑬ 番外編

連載

司馬遼太郎の『峠』に描かれている「越後長岡」の風景を現在に訪ねるシリーズ。今回は番外編として、加茂を歩いてみました。

● 峠下巻・新潮文庫358ページより

「加茂」

へゆく。加茂を本宮にするつもりだった。加茂は越後の東部山地が西に尽きて平野がはじまるころとそこにあり、北は新潟から八里、南は長岡から八里、そのあいだを信濃川が水運を提供している。長岡城をうばいかえすにはこれほどいい戦闘指揮所はないであろう。

五月十九日、長岡城が西軍の手に落ち、奥羽越列藩同盟軍（東軍）は形勢を立て直すべく後退します。森立峠を越え、栃尾、葎谷、桑名藩預所だった加茂へと退却し、五月二十一日、河井は当初は皆川家、さらに加茂町の大庄屋に拠点を構えたとされます。

なぜ加茂が諸藩の集合場所になったのでしょうか。理由は二つ考えられます。一つめは地理です。加茂は、信濃川水系の加茂川がまちを貫き、越後平野と山間地との境目、城奪還には戦略的要地といえました。

二つめに経済力です。加茂町

るのです。

「北越の小京都」加茂は、現在でも古い小路などに土蔵・町屋が残っています。古くは加茂川の水流により木材が運ばれ、桐箆笥など木工業が発達しました。

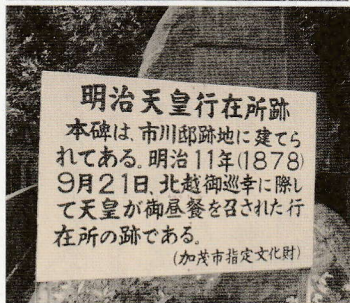
は、経済的にうるおっていました。市川家という加茂二帯の大庄屋は、金と銀の両替商の役割も担い、その交換量は新潟よりも多かったといわれています。多額の軍資金の確保地としては最適だったのです。

かくて同盟軍の各藩代表が加茂に集結し、五月二十二・二十三日、軍議を開きました。これが加茂軍議です。この地で河井は体勢を立て直し、今町、そして八丁沖へと南下し、長岡城を奪還す

か、明治十一年、北越巡業中の明治天皇がここで御昼餐を召されたことが刻まれています。現在の銀行裏手には市川邸の船着場もあつたといわれる加茂川が流れています。また近くの上町コミュニティセンター前には、皆川邸



東軍兵士の壘



明治天皇行在所跡
本碑は、市川邸跡地に建てられてある。明治11年(1878)9月21日、北越御巡幸に際して天皇が御昼餐を召された行在所の跡である。
(加茂市指定文化財)

市川邸顕彰碑



皆川邸跡

跡を示す石碑が立っています。

JR加茂駅から徒歩五分の加茂山公園には、「加茂」の名の由来となった青海神社がまつられています。この公園そばの大昌寺は、同盟軍の米沢藩が本陣を置

遠方からの客人

● インタビュー⑩正しいと思ったらやる



渡邊真龍さん

平成26年7月9日

河井継之助も字んだ、陽明学が好きです。今回講演後の一番先の観光地に選んだ恵那市は陽明学者、佐藤一斎の出身地でしたし、吉田松陰・坂本龍馬など、幕末の志士たちを動かした陽明学の「正しいと思ったらやる」という考えに魅力を感じます。ある意味危険な考えだけれど、そういう人であれば新しい世界は作れない、と思います。

● 長岡市の印象は

高速道路・新幹線もあって交通は抜群なのに、観光の宣伝が今一つ足りないと思います。記念館まで大きな案内板もなく残念です。お米とお酒だけでは、観光に弱気があります。今後に期待したいです。

● 来館のきっかけは

歴史が好きで、講演後に色々な土地に足を運んでいます。今回は、愛知県

新城市で講演した後、長野県恵那市の観光後、「東洋のポンペイ」と呼ばれる群馬県嬭恋の鎌原観音堂に立ち寄り、長岡へ。良寛さん、河井継之助、山本五十六の軌跡を尋ねに来ました。

● 河井継之助について

お時間のないなか、急なインタビューにもご協力よく引き受けて下さって、いつしか記念館職員はその饒舌な話し方に引き込まれていました。今回は惜しくも良寛さんの地へ行くことは断念され、いつかお車でいらっしやるとお帰りにになりましたが、またぜひ河井継之助記念館にも足を運んでいただければ幸いです。

(黒田)

※参考文献
「かみいろ各号2014・4」加茂商工会議所
「小京都加茂山古道 加茂歴史散策マップ」
加茂商工会議所

初夏にかけて、当館のガトリング砲などをお貸しした岡山県立博物館の方に記事を書いていただきました。

特別展「山田方谷」における河井継之助

岡山県立博物館副参事 竹原 伸之

平成二十六年五月二十三日から六月二十九日まで、岡山県立博物館において特別展「山田方谷」を開催しました。出品資料は全百七十二件。二百点を越える資料を展示しました。その約四分の一は、展覧会初出品とな

るもので、中には調査段階で新たに発見された資料もありました。そして、これらの展示資料のメインの二つが、「塵壺」やガトリング砲など河井継之助に関する資料でした。

山田方谷は、幕末から明治初

めにかけて活躍した儒学者です。備中松山藩主板倉勝静の元で藩政改革を断行。莫大な借財を抱えた藩財政を数年間で立て直し、逆に多くの蓄財を作り上

げました。多くの藩が財政難に苦しむ中、その改革は注目され、様々な藩の藩士が備中松山藩を視察に訪れました。河井継之助が方谷のもとを訪れたのもこの頃です。一方、藩主勝静は幕府から寺社奉行に抜擢され、方谷もまた、勝静の顧問として幕末の幕府政治に携わることになりました。

本展覧会では、方谷の生涯を大きく四つに分けて紹介しました。第一章は陽明学者山田方谷の誕生。第二章は、政治家山田方谷と備中松山藩の幕末。第三章と第四章は、教育者山田方谷です。近年、教育者としての方谷が注目されており、今回も第二章にわたって取りあげました。

河井継之助も、方谷に影響を受けた人物の一人として紹介しました。「塵壺」や両親への手紙からは継之助の人物が偲ばれましたし、大迫力のガトリング砲（模型）は、北越戦争の凄まじさ、激しさを想像させました。多くの来館者がこの貴重な資料に感激し、見入っていました。担当として、遠く岡山の地までお貸しただけに心より感謝しています。一方で、短い期間ながら方谷やその門人たちと充

実した時間を過ごした岡山の地に再び訪れたことを継之助も喜んでくれていたようにも思っています。

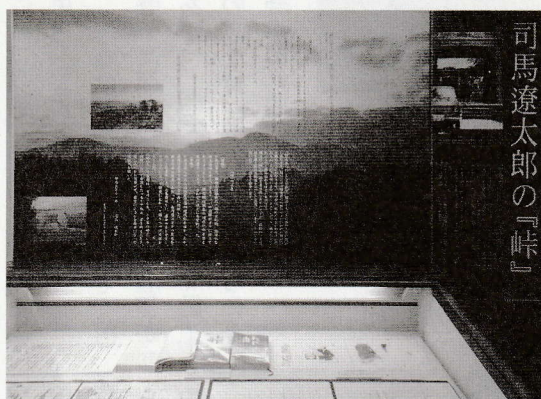
今回の展覧会が契機となり、山田方谷と河井継之助の顕彰がいつそう進み、併せて両者の研究が進展することを願っています。

竹原伸之(たけはらののぶゆき)プロフィール

昭和42(1967)年岡山市生まれ。平成2年に岡山県立学校教員として採用後、岡山県立古備文化センター、公立高等学校教諭、岡山県教育庁、岡山県立図書館をへて、平成22年4月より現在岡山県立博物館副参事。

司馬遼太郎の『峠』

●パネル紹介



パネルにも記された、その終わりの部分を紹介します。

―かれは商人や工人の感覚で藩の近代化をはかったが、最後は武士であることにのみ終始した。

―武士の世の終焉にあたって、長岡藩ほどその最後をみごとに表現しきった集団はない。運命の負を甘受し、そのことによって歴史にむかって語りつづける道をえらんだ。

―書き終えたとき、悲しみがなお昇華せず、虚空に小さな金属音になって鳴るのを聞いた。パネル前のケースには、赤・青・黄・緑とカラフルに手直しされ、何回も推敲された自筆原稿が展示されています。(渋谷)



山田方谷展チラシ(左)とガトリング砲展示風景



河井継之助はどういう人物？

連載

その⑭ 加茂軍議（一）

世に小千谷会談は著名だが、加茂軍議はそう知られていない。慶応四年（一八六八）五月二日に小千谷町（小千谷市）寺町の慈眼寺で行なわれた小千谷会談と同月二十二日、二十三日、加茂町（加茂市）の大庄屋市川正平治方で、奥羽越列藩同盟軍の諸将が集まった軍議は、北越戊辰戦争の会談では双壁である。

加茂は交通の要衝で、越後の商人が何かと利用していた。河井継之助も藩政改革において、加茂町商人に便宜をはかってもらっている。また加茂町の蘭方医森田専庵とも交流があった。その加茂に長岡落城後、長岡藩兵と奥羽越列藩同盟の諸藩兵が集結した。さしせまった問題は連合軍として、どう新政府軍と戦うかが対策会議の目的だったが、そこで、河井継之助はインシアチブを取る。

奥羽越列藩同盟は米沢・仙台・会津・庄内の各藩がリードして、奥羽越二十九の諸藩が連合してできた同盟軍である。そ

れに旧幕府脱走兵の衝鋒隊や桑名藩兵が加わった。桑名がこの加茂軍議に深くかかわるのは、加茂が桑名藩の預り領地であったからだ。軍議には米沢・会津・上山などの奥羽諸藩と越後の村松・長岡などの藩が列席した。

加茂町は桑名藩十一万石松平定敬の預り地であった。分領といっても良いほど桑名侯の風紀が浸透していて、豊かでおだやかな土地柄であった。当時、大庄屋市川正平治という商人が大庄屋をつとめ、金融業も兼ねていた。また加茂は地形も三方が山に囲まれ、真ん中に加茂川が流れ、信濃川が通じており、新潟へ八里、長岡へ八里の好位置にあった。

その加茂町へ会津藩をはじめとする同盟軍が五月ころから進駐を開始していた。そこへ長岡藩兵が落ちてきたのである。早速同盟軍の諸藩代表が会津藩の宿陣である市川正平治宅で開かれた。軍議は今後の越後戦線を同盟軍がどう戦うかを定める重要な軍議となった。日時は慶応

四年五月二十二日、主な各藩代表は会津藩一瀬要人、米沢藩中条豊前、上山藩祝新兵衛、村松藩森重内、長岡藩河井継之助、桑名藩立見鑑三郎である。

加茂軍議の席上、継之助はずかずかと村松藩代表席に赴き、「長岡落城戦の際、私共へ鉄砲を打ち掛けました理由をお答えください」と詰め寄っている。

村松藩の森重内は老人だったから、馬耳東風と受け流したが、もう一人の近藤貞は、河井の剣幕に狼狽した。

「当藩兵は決して裏切ったのでござらぬ。私共がこうしてこ

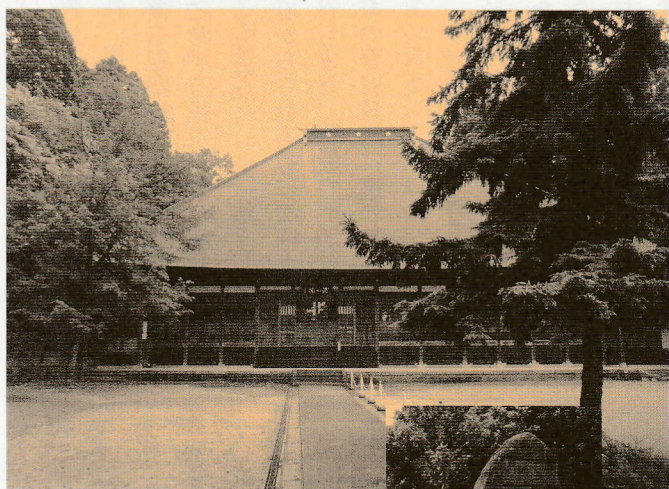
の席に参上しているのは、列藩の義を了せんが為。決して不義はいたしません」と弁解した。

「我が兵は防壁の前から攻撃を受けたのではなく、後から銃撃されたのですぞ。濃霧とはいえ、宿陣地の安善寺・正覚寺の西側には、我が陣地が構築されていたことをおきびきりくださることは当然、知悉されていたと思っていました」

近藤は村松藩中であって、清廉で高潔な目付役として名望があった。国学の素養も高く勤王の志を持っていた。だからこそ会津藩に同情的だった。

村松藩には掘右衛門七郎という佐幕派家老がおり、積極的な同盟参加を推進していたが、その背景には宿年の藩内派閥抗争もあった。近藤はむしろ、それらの局外にあつて、村松藩をまとめようと加茂軍議に列席したのだが、結局、長岡落城の責任を追及される形となつてしまったのである。やがて、河井継之助の舌峰は、長岡城の奪還に課題が移り、その作戦計画が継之助から示された。まず長岡へ向う途中の要衝の奪還であった。

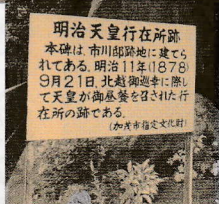
（稲川）



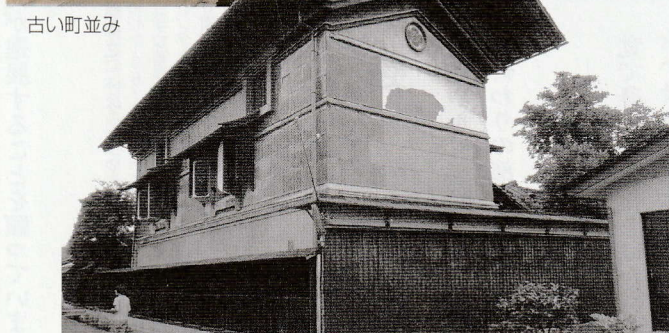
大昌寺の本堂



古い町並み



市川邸顕彰碑



町中に点在する土蔵

（永井氏撮影）

「塵壺」を読む

14 連載

七月十七日、西方村長瀬の山田方谷に弟子入りを願った継之助だが、実際に入門許可が出たのは八月三日と記されている。藩への許可願の受理には時間がかかったようで、方谷から「今日願いを出さん、直にも済まざる事故、それ迄は宿に逗留のこと」といわれたという。そのため継之助は、文武宿の花屋というところに宿を取っていた。

ここで日記に登場する建物を整理しよう。一つ目は、西方村長瀬の山田方谷邸(本宅)である。河井継之助が十七日に訪ねたとき、まだ工事中であった。現在のJ R伯備線方谷駅近郊に位置する。二つ目は、松山城下の「水車」である。もともとは藩侯・板倉氏の別邸であった。方谷は、半月は「水車」からの城下勤務、残りの半月は長瀬の本宅で開墾にあたる生活をしており、継之助も二ヶ所で方谷先生と会話を交わしている。継之助は、しばらく自炊しながら「水車」に逗留したらしい。三つめは、松山城下にある、文武宿の花屋である。文武宿とは、学問・武芸の

修行者(書生)を泊める宿らしく、松山だけでなく全国にあつたという。現在本町にある油屋旅館の先祖が経営していたといわれている。

方谷との話の中で「土着」という言葉が出てくる。そもそもなぜ方谷は、松山城下から三里(十二キロ)も離れた長瀬に開墾屋敷を作り居住したのか。すでに備中松山藩の元締として、評価を得ていたのだから、城下に屋敷を構えるという選択肢もあつたはずである。そのころは、守備の薄い田舎に武士を住ませ、普段は農業自給をさせながら、藩の守りも固める「土着」政策を自ら実践していたから、といつたところだろうか。いわゆる「屯田兵」のはしりともいえる。

さて継之助にとつては、弟子入り許可待ちの期間とはいえず、有意義な時間であつたようだ。兄弟子の家に招かれて話をするなど、交流を深めている様子が見える。日記には、林富太郎、三島貞一郎、進昌一郎、会津藩の土屋鉄之助、松代藩士の稲葉隼人、神戸謙次郎などの名がつつ

られていた。会津藩の土屋鉄之助は、秋月次郎と同様、藩命を受けて諸国視察をしている。二十日には、「水車」にて継之助としゃべつたこんな記述がある。「土屋は諸藩を訪ね、学校の様子を始め、衆人に応接、数々珍しき咄もあり。淡州の士兵、ヲロシヤ船へ乗りし咄、小浦惣内の咄、水戸の咄、姫路の学校面白き談、数々あり」実は後日、継之助が長崎へ向かう行程の途中で出会い、長崎に秋月次郎がいるという情報を教えてくれたりしている。

られていた。

松代藩士の稲葉隼人は、ホラ貝・太鼓・采配を持つ、いわゆる山伏の格好で登場する。信州松代藩といえば佐久間象山の故郷だ。継之助には「不足取者(取るに足らざる者)」とうつつたようだが、「ホラガイハは余程巧み、未だ聞かざる処なり」とある。あまり表だって他人のことをほめない継之助だが、音色には感動したのかもしれない。

他国から来た藩士だけではない。兄弟子方の出自も様々だ。「山田は西方の百姓、林富太郎は玉島の商人、三島貞一郎は他領の庄屋の息子、林・三島の両人は近頃の取立なり」「進昌一

郎も庄屋より酒屋へ、養子に行きし者」とある。(三島貞一郎(中洲)は、十四才で方谷に学び、昌平坂学問所で学んで、藩校・有終館の学頭まで進み、明治になって漢学塾・二松学舎を設立している。)

郎も庄屋より酒屋へ、養子に行きし者」とある。(三島貞一郎(中洲)は、十四才で方谷に学び、昌平坂学問所で学んで、藩校・有終館の学頭まで進み、明治になって漢学塾・二松学舎を設立している。)

方谷をはじめ兄弟子方の出自は武士ではない。しかし学問所で優秀な人材は、抜擢して士人に登用された。継之助が見学した藩校「有終館」だけでなく、庶民に学問を授ける「教諭所」が各地にあり、教育熱心だった風潮が読み取れる。二十日あたり

の文面から、方谷への呼称が「山田」から「山田先生」と変わつてきていて、身分はさておき師と呼ぶにふさわしいと感じてきている継之助の心境の変化をくみとることができらるだろうか。

二十一日の末尾に含蓄深い言葉がつけられている。「財と文武と富国強兵、兼ねる之努、兎角、財にのみかかると、文武すたれると、山田の咄、儉約も能けれ共、文武不振シテは残念なりと、上杉之振ふか不振か之談之有、望、中々高し」

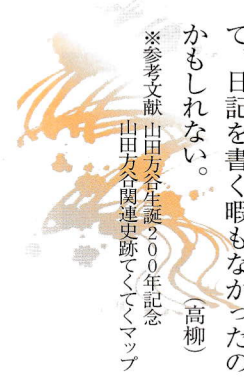
儉約儉約で財政破綻は免れたのはいいが、文武が廢れてしまうのは残念なことだ、と上杉の例

を挙げている。「教育は国家百年の計」という言葉がある。すぐには育たないからこそ、将来を担う若者を育てていかなければ、一時的に財政破綻をまぬがれても未来がない。いかにも財政改革家と教育者を兼務した、方谷らしい発言ではないだろうか。

二十二日からは、日付・天気・花屋に宿泊、などの記述のみの日々が、六日ほど続く。理由は本人が次のように書き記している。「如何にも道中之疲故か、頻り二眠く、あくまで休、其暇ニ、兵庫より筆も不取故、失忘れも多けれど大略を記す、此二日之仕事なり」

なにぶん疲労困憊で眠く、寝起きの合間に机のある松山でこまでの日記のまとめ書きをするのが精一杯だった、七月十一日の兵庫から筆もとっていないため、忘れていくことも多いかもしれないが大略を記しておく、というのが当人の主張である。もしかしたら方谷先生や兄弟子との議論に夢中になりすぎて、日記を書く暇もなかったのかもしれない。(高柳)

※参考文献 山田方谷生誕200年記念 山田方谷関連歴史跡をくぐりマップ



八町沖の星空、長岡藩士は夏オリオンを見たか

別稿
特寄

渡邊 信夫

夏は太平洋戦争について振り返る季節かもしれませんが、長岡に於いては戊辰戦争に想いを馳せる季節のようにも思います。

私には長岡城奪還に向けての八町沖の深夜の横断は、戊辰の戦いの奇襲作戦の中でも、特に異彩を放つ戦いのように思えます。深夜に広大な沼地を横断するあまりにも過酷な奇襲だからです。

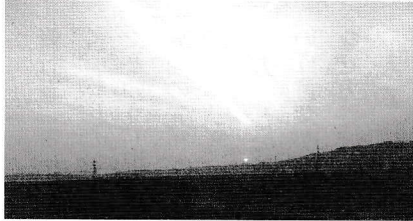
河井継之助傳にも、月夜の中行軍の様子が描かれています。しかし、一方では闇夜に乗じて作戦が行われたような記述を見たこともありません。

一体、どちらが本当なのでしょう。私は当時の星表をスマートフォンアプリで再現してみることになりました。

作戦が決行された1868年7月24日は、現在の暦に換算すると、9月10日に当たります。旧暦の24日付近は下弦の月に当たります。下弦の月は満月から90度離れているため、月の赤緯が0度だとしたら、月の出は丁度夜半になります。しかも八町沖の東側には山々が連なっていて、実際の月の出は夜半過ぎになりそうです。

長岡藩士が作戦を決行したのは午後10時と言われていますから、確かに闇夜を利用したかのように見えます。しかし、本当にそうでしょうか？

秋分の日に近い下弦の月は、白道（天球上を月が通る見かけ上の道）の最も北を通過するのです。実際に計算してみると、午後11時過ぎには月が昇ってくるのがわかりました。では東側の山々による遮蔽は期待出来るのでしょうか？ 私は実際に現場に行ってみました。



2014.6.20。夏至の頃の太陽。

した。観察した場所は八町沖の梯子橋の付近です。太陽は山々の

夏至の頃の太陽の位置は、秋分の日の頃の下弦の月の位置とほぼ同じです。従って、夏至の太陽の昇る位置を観察すると、おおよその見当がつくはずですが、夏至の頃の日の出の時刻を観察してみます。

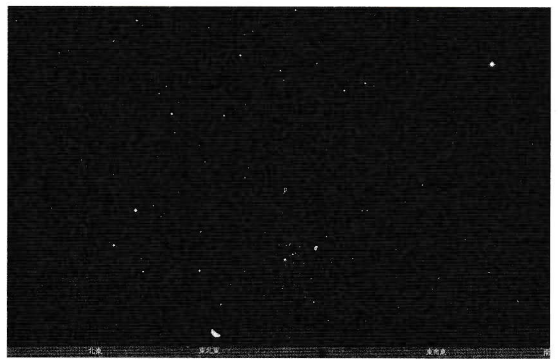
連なりの北側から昇ってききました。計算された地平線からの日の出に比べ、約10分の遅れです。従って、1868年9月10日の下弦の月の出は午後11時18分頃と考えられます。

長岡藩士たちは闇夜の中から沼地に入りましたが、1時間余りで月の出となり、月夜の中の進軍となったのです。月のこうこうと照らす中の進軍はさぞや胆を冷やしたことでしょう。しかし、一方では月が良い目印になったかもしれません。夜の八町沖は、現代でも外灯はほとんどなく、方角がわかりにくく思えることがあります。

実際に夜中に八町沖の田んぼの傍らに行ってみました。大きな道路から外れて、田んぼの脇に立つと、あたりの風景は大きく変わりました。土地が低くなるため、視野が変わるのです。緩いすり鉢状になっている八町沖の中に進むと、それまで道路から見ていた風景が一変します。

それまで地平線付近に見えていた遠くの集落の外灯は見えなくなり、視野から一切の灯りが消えてしまいました。かろうじて長岡市街地の上空が明るくなっているのがわかりますが、戊辰の戦いの頃は真っ暗な空だったはずで、9月の冷たい沼地の水に浸かりながら、方角もわからないのでは、いくら武士でも心身ともに堪えたのではないのでしょうか。そんな時、北東の空から月が昇ってきたことは、気持ちの面で、大きな救いになったと思います。月を左後方に見ながら進めば、真っ暗な沼地でも道を誤らずに横断出来るはずですから。藩士たちは下弦の月が照らす沼地を必死に渡ったことでしょう。

藩士たちがようやく対岸にたどり着く頃、東の空低く『オリオン座』が昇ってきました。星座を知っている藩士はいませんでした。オリオン座の三ツ星は日本でもよく知られていました。



1868.9.10午後11:30頃。長岡藩士が沼を渡り始めた頃の東の星空。月が北東の山の稜線に姿を現した。



2014.8.20頃。未明の空、オリオン座の三ツ星が見える。

少し星に詳しい人がいたら、三ツ星の昇ってくる方角が真東だとわかったことでしょう。下弦の月を抱いたオリオン座を右後方に見ながら、長岡藩士たちは八町沖を渡り切ったのです。

※星図は株式会社アストロアーツのステラナビゲータを使用しました。

渡邊信夫わたなべのぶプロフィール
1962年新潟市生まれ。子どもの頃から星にひかれ、大人になっても趣味は天体観測。一方、同じく子どもの頃から、新潟の地元の郷土芸能を父から習い覚え、新潟県の郷土の歴史に興味を覚える。現在、長岡市内でコンピュータを営業。

只見塩沢墓前祭

河井継之助の命日八月十六日に、終焉の地である福島県只見町塩沢医王寺にて墓前祭が執り行われました。



只見塩沢墓前祭

今年（前日）からの雨で、長岡から向かう六十里越えが案じられました。予定通り赴く事ができました。医王寺の河井継之助の墓前には、雨天にもかかわらず地元を中心とする多くの方々が参列され、小千谷の慈眼寺住職による読経に手を合わせておられました。追悼の言葉、焼香と続き無事終了となりました。

（柴田）

会員の声

「会員の声」大募集！

●継之助と相場助

河井継之助で、痛快とも意外とも思われるのが経済感覚である。鳥羽伏見のあと江戸藩邸から長岡まで、舶来の銃砲弾薬を買い、米や銅銭を売り、相場で儲けながら戻っている。また藩経済再建も短期間で平和的に行なっている。山田方谷に学んだとはいえ、京・長崎から遠く越後に生まれた武士の、地域ごとに異なる「米」「銀銅」相場に着目したセンスはどこから来るのだろう。経済学者が経営者ではないように、学問だけで赤字を黒字には出来ない。先物と現物の株式。商品相場の動きを操るヘッジファンドに共通する生まれつきの「相場勘」の持主であつたに違いない。明治まで生きて、経済を動かすことがあつたなら西欧に列する経済大日本が約束され、第二次大戦もなかつたかも知れない。武士としての矜持に立ち、短命であつたことが惜しまれてならない。

— 山田 清（新潟市）

●河井継之助、最後の五日間

河井継之助は亡くなる前の五日間を只見塩沢の村医矢沢宗益氏の家で過ごしました。負傷した膝が悪化した時です。高熱を出しうわごとを言ったり、痛みに耐えかねて不機嫌になったり、周りの人を困らせたことも多かったことでしょう。この五日間は矢沢家の人達も、河井継之助の世話をする等大変だったでしょう。しかしどういふ訳か、矢沢家では河井継之助の亡くなった部屋を大切に保存しました。それは当主が亡くなった後も続きま

す。九十年以上も経った一九六二年までその地にそのままの姿で残され、その部屋には、継之助のゆかりの品々も大切に保存されてきました。一九六二年ダム建設のため、その矢沢家は水没する事になります。この時の当主も、この家の保存に懸命になります。行政に移築を訴えたり私財を投じたり大変な努力をしました。その結果、現在只見の河井継之助記念館に、終焉の間がそのまま残されています。河井継之助の死を目の当りにした矢沢家の人達は、その死に何か大きな感動を受けたからに違いありません。

— 安食正明（千葉県千葉市）

●まるで幕末

最近、人に会うと出身地を聞いてしまふ。先日東京都（江戸）で何人かの人に出会った。東京在住ではあるが、桑名の出身だぞうだ。また別の人は、薩摩。京の維新のお公家さんの子孫もいる。佐久間象山のような人の所には、いろいろな出身地の方が全国から集まっている。まるで幕末の江戸を歩いている感じがした。是非、人に出会ったら出身地を聞いてみてください。さつと幕末に繋がるでしょう。そこで現代の継之助に出会えるかもしれせんね。

— 廣井 晃（長岡市）

●民権國之本吏者民之權

私が、河井継之助を知ったのは、司馬遼太郎の「峠」です。それまで他の司馬作品を読んでいました。他の主人公とは違い、自分の藩にとどまり、藩のみを考える姿は衝撃的でした。中でも継之助の書とされる「民者

國之本吏者民之權」を見た時は、江戸時代にこのような先進的な考えをもっていたことに驚かされました。現在、公務員として働いておられますが少しでもその姿勢を見たいと思います。— 渡辺貴広（宮城県仙台市）

●八十里峠

「八十里 腰抜け武士の 越す峠」。河井継之助が長岡落城後、主君が待つ会津へ落ち延びて行く途路、自嘲を込めて詠んだ句だぞうです。説明書きに寄りますと、全長八里の峻烈な峠で、二里が十里にも感じられることから、八十里峠と称されているそうです。この難所である峠もかつては南会津と越後を結ぶ要衝であったとのこと。残念ながら今は、通行不能となっていますが、道路完成のあかつきには、継之助を偲んで、踏破してみたい峠です。— 早井信英（新潟市）

●山本五十八元帥を偲ぶ

軍人でありながら戦後これほどテレビ、映画、DVDなどに騒がれる魅力はどこにあるのでしょうか。山本さ

んは「私は河井継之助が小千谷談判に赴き、天下の和平を談笑のうちを決しようとしたあの精神をもって使命に従う。軍縮は世界平和、日本の安全のため、必ず成立させねばならぬ。」と、和敬精神をもって臨んだといえます。山本さんの軍人としての哲学は、終始一貫「百年兵を養うは平和を護るためである。」との不動の信念を持つたところにあると思います。

●人生の師なり

私は、浅草山へ一緒に登山した友達から「峠」を読んでみたらと言われ、読んで感動いたしました。それ以来私の生き方を決める人生の指南書とさせて頂いてから、四十数年の月日が経ちます。新婚旅行は会津塩沢に足を運び、河井先生の風を感じながら終焉の地にてお祈りをさせて頂きました。司馬先生に河井先生を世に出して頂き嬉しいです。牧野家の皆様、会員の皆様のご健康と御多幸をお祈り申し上げます。— 外山 東（魚沼市）

●記念館オリジナルポストカード販売中！
（5枚組、パッケージ付300円）郵送も承ります。

おしらせばん

●河井継之助旅日記『塵壺』を読み解く会
毎週土曜日 午後1時～3時

●今泉鐸次郎著『河井継之助傳』を読む会
第2・4月曜日 午後1時～3時

●楽しい詩吟教室：第1・3月曜日
午前10時～11時30分

詳細は記念館へお問い合わせください。

●講演会報告

四月二十六日に行われた友の会総会は今年で八回目を迎え、その後講演会が行われました。講師は司馬遼太郎記念館特別学芸員の増田恒男さん。横浜からお越しくださった氏の演題は「『峠』と横浜について」。会場は集まった二百名以上の来場者の期待からか暑く感じるほどでした。

冒頭、映し出された司馬先生の写真を背に増田さんはこの講演の結論を述べます。「継之助は横浜で政治経済を学び、その後

の思考行動に大きな影響を与えたのが横浜なのである。」増田さんは司馬遼太郎著『峠』の中で主要な舞台である横浜を、開港までさかのぼり、継之助と横浜



司馬遼太郎記念館特別学芸員の増田恒男さん

河井継之助記念館 友の会について

会員の交流や情報交換を通して継之助について親しみ、学び、記念館を応援する会です。

- 会員数/正会員：498名/協賛会員：49名(8/31現在)
- 特典/①友の会会報「峠」配付
②会員との交流 ③催事案内・参加 ④研修旅行への案内・参加

会員募集中

- 入会手続き
①申込書に会費を添えて、事務局へ持参。
②申込書を事務局へ送り(郵送、FAX)、会費は銀行振込または郵便振込で納入。(手数料は本人負担となります)

- 年会費 ※会計年度は3月31日まで
①正会員/(ア)小・中学生:500円 (イ)高校生以上:2千円
②協賛会員/一口5千円(法人の他、個人でも可)

- 口座について
・加入者名/ 河井継之助記念館友の会
・口座番号/ 郵便局 00560-9-96432
長岡信用金庫本店営業部 普1032829
北越銀行本店 普1764663
大光銀行本店 普3011256
第四銀行長岡営業部 普1560562

※郵便局の場合は手数料無料の払込用紙が事務局にありますのでご利用ください。

- 友の会事務局/河井継之助記念館
友の会ホームページアドレス <http://tsuginosuke.net/>

新入会員ご紹介

(平成26年4月1日～平成26年8月31日現在)

- | | | | | | |
|-------|---------|-------|--------|------------------|---------|
| 安藤 秀一 | 新潟市中央区 | 前田 佐一 | 新潟県長岡市 | 湯浅 次郎 | 徳島県小松島市 |
| 長谷川伸彦 | 新潟県阿賀野市 | 森田 茂夫 | 埼玉県深谷市 | 佐藤 光代 | 新潟県出雲崎町 |
| 濱村 明弘 | 山口県柳井市 | 山崎 清貴 | 東京都杉並区 | 以上8名(アイウエオ順・敬称略) | |

の関係が明らかにされました。

『峠』の中にある「横浜出陣」の章を取り上げ、横浜は開港前民家五十軒ほどの漁村であったが、開港場に指定されてから商店が増え市街地を形成しはじめたと当時の様子を説明。にわかには出来上がった町は、町人が商いをするために出来た町であり、武士が全く役に立たない所でした。そして、継之助の「横浜には明日の日本がある」の言葉にも、彼の非凡さが表れていると語られました。

また旅日記塵壺の安政六年六月七日の横浜開港直後の記述には、横浜が「いざれ発展するであろう」という推測と、外国人女性の容姿を褒めてい

る箇所が見えます。このころの武士階級にとつて外国人は嫌悪する対象であり、彼らが闊歩する横浜は見るも寄るも汚らわしい場所だったはずですが、増田さんはそれどころか横浜を客観的にかつ冷静に見、未来を見抜いているところに河井の洞察力の凄さがあると賞讃されました。また継之助が人を介さず、直に外国人と交渉している事にも先見の明を感じておられました。こういった形で継之助は経済感覚を学んでいたのです。

増田さんは途中、司馬遼太郎先生の取材方法なども紹介。現

地の風景を見て、おいをかき書くのが司馬遼太郎先生であったと語られていました。そして最後に『峠』を読むことで横浜という町を、国際環境、国内の政治状況を、立体的に知る事が出来るのだと話されました。たくさんさんの資料や横浜の各地の写真とともに聴く増田さんの講演は、私達が継之助の目線になったような、そんな一時間半でした。司馬先生も取材の道中、同じ気持ちを感じた方もかもしれません。横浜と聞くと気持ちが躍る。そんな継之助と同じ感覚です。

編集後記

●今年の夏は全国的に雨が多く、各地で甚大な被害を被りました。被害に遭われた方々が一日も早く日常を取り戻されることをお祈りいたします。

さて、会報「峠」もおかげさまで第十六号の発行を迎える事が出来ました。私たち事務局も一部新メンバーに変わり初の大仕事となりました。今回ご寄稿いただいた方々をはじめたくさんの方々に御協力を賜り大変感謝いたします。ありがとうございました。また、今号発行と前後し、ホームページもリニューアルの予定です。今後も、より多くの河井継之助ファンに愛され、親しまれる記念館を目指してまいります。変わらぬご支援のほど宜しくお願いいたします。

(柴田)

- 編集人 稲川明雄 高柳吟音 布川博子
黒田清江 柴田三枝子 渋谷七重
島岡真由美
広報委員 猪本南ハ 渡辺静江 駒形豊
関口トシ子 高木春夫 高橋謙
田邊定雄 羽賀龍介 廣井晃
堀口晴夫 山村雅隆 脇屋雄介
渡辺千雅
構成・日刊マイスエッセイ編集部
印刷 高遠印刷株式会社